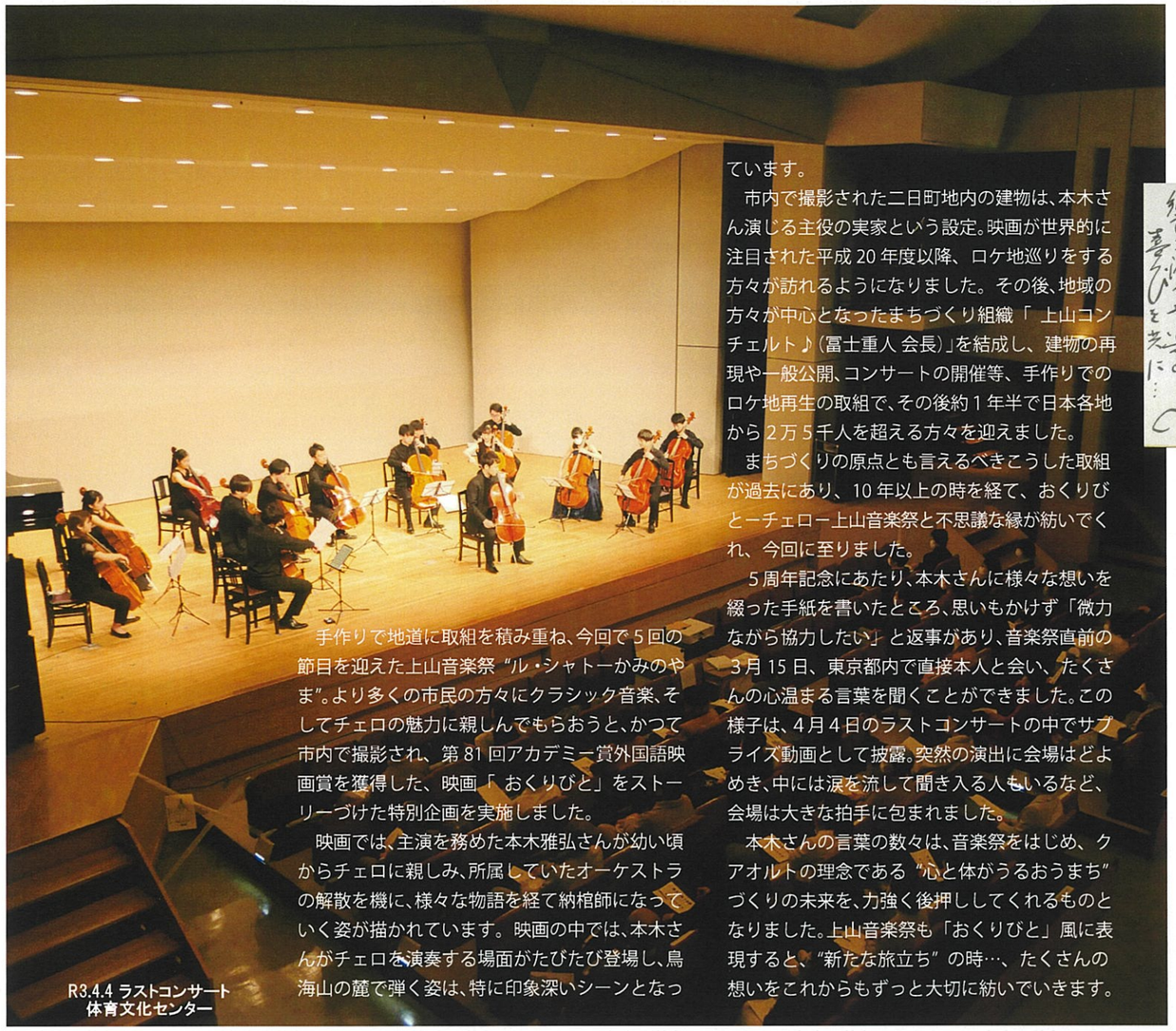


R3.4.4 ラストコンサート
体育文化センター

たくさんの想い紡ぎ５周年

上山音楽祭 “新たな旅立ち”の時

俳優・本木雅弘さんからの贈り物

手作りで地道に取組を積み重ね、今回で５回の節目を迎えた上山音楽祭 “ル・シャトーかみのやま”。より多くの市民の方々にクラシック音楽、そしてチェロの魅力に親しんでもらおうと、かつて市内で撮影され、第 81 回アカデミー賞外国語映画賞を獲得した、映画「 おくりびと」をストーリーづけた特別企画を実施しました。

映画では、主演を務めた本木雅弘さんが幼い頃からチェロに親しみ、所属していたオーケストラの解散を機に、様々な物語を経て納棺師になっていく姿が描かれています。映画の中では、本木さんがチェロを演奏する場面がたびたび登場し、鳥海山の麓で弾く姿は、特に印象深いシーンとなっています。

市内で撮影された二日町地内の建物は、本木さん演じる主役の実家という設定。映画が世界的に注目された平成 20 年度以降、ロケ地巡りをする方々が訪れるようになりました。その後、地域の方々が中心となったまちづくり組織「 上山コンチェルト♪（冨士重人 会長）」を結成し、建物の再現や一般公開、コンサートの開催等、手作りでのロケ地再生の取組で、その後約１年半で日本各地から２万５千人を超える方々を迎えました。

まちづくりの原点とも言えるべきこうした取組が過去にあり、10 年以上の時を経て、おくりびとーチェロー上山音楽祭と不思議な縁が紡いでくれ、今回に至りました。

５周年記念にあたり、本木さんに様々な想いを綴った手紙を書いたところ、思いもかけず「微力ながら協力したい」と返事があり、音楽祭直前の３月 15 日、東京都内で直接本人と会い、たくさんの心温まる言葉を聞くことができました。この様子は、４月４日のラストコンサートの中でサプライズ動画として披露。突然の演出に会場はどよめき、中には涙を流して聞き入る人もいるなど、会場は大きな拍手に包まれました。

本木さんの言葉の数々は、音楽祭をはじめ、クアオルトの理念である “心と体がうるおうまち” づくりの未来を、力強く後押ししてくれるものとなりました。上山音楽祭も「おくりびと」風に表現すると、“新たな旅立ち” の時…、たくさんの想いをこれからもずっと大切に紡いでいきます。

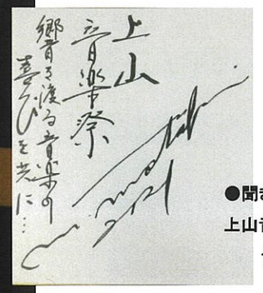
H21.10 ロケ地にオスカー像が凱旋

H19.4 映画撮影の様子（上山市内）

H21 ロケ地再生の活動

Special Interview

俳優・本木雅弘さん



●聞き手（R3.3.15 東京都内）
上山音楽祭 音楽監督 中木健二
協力アーティスト 永田美穂 上山市出身

♪なぜ、 今回のインタビューを引き受けてくれたのか。

上山市の皆さんとは、映画「おくりびと」をきかっけに出逢うことができ、時を経て作品をこういう形で思い出してもらえることが本当に嬉しかった。地域活性化のために皆さんが色々と考えて、クアオルトという考え方を踏まえて音楽祭をしていると聞いて、とても素敵だなと。微力ながら少しでも協力できたらと思った。

♪本木さんにとって映画「おくりびと」とは。

上山市の皆さんとつながったきっかけ、そしてあらゆる意味で広がり評価を受けた、自分の中でも印象深い映画。そして何よりも音楽に疎い自分が、役柄を通じてチェロと出逢えたことは非常に大きかった。

長男がアメリカの大学に留学した際、寮のルームメートの一人が外国人で、チェロをしていて。私がたまたま息子の入寮の手伝いに行った時に、「えっ！もしかして !?」って驚かれて（笑）「おくりびと」の劇中の曲を弾きたくてチェロを始めたと。すごく喜んでくれて、彼の白いチェロケースにサインを書いたエピソードもあった。

非常に多くの方が映画を観てくれ、それがきっかけでチェロを始める方もいるんだと感じたし、上山音楽祭には過去に外国からも受講しに来る人がいることを聞いて、そういう広がりがすごいなと思った。

♪「おくりびと」は、 自然や所作、 音楽が美しく、 とてもきれいな映画であり、 内容も死や夫婦の愛情、 親子など、 とても人間的で深いものを表現している。 それらを訴えかける演者はどんな気持ちなのか。

影響を受けた納棺師の存在があり、20 代にインドに行った際、生と死が共存している、アジア人としての強い感覚、そういうものが記憶として生かされていた。

「おくりびと」で出てくる楽器・チェロはたまたまの設定ではあったが、音色が弦楽器の中でも人間の肉声に非常に近く、形そのものも人間のボディに近い、身体を抱きしめる様な所作になることも、亡くなった方を送り出す、魂を抱く様な、そこにつながることもあったので、結果的にはチェロ以外考えられなかったし、とても映画の大事な要素の一つになっていたと思う。

♪実際に本木さんがチェロを弾く姿は、 チェリストから見てもまったく違和感がなかった。 たくさん練習したのか。

１か月で型を付けなければならず、最初は右手と左手違う動きをすること自体が混乱して、ものすごくストレスだった。ちょうどその時指導してくれた先生に言われたのが、「１日５分でも 10 分でも良いから、チェロを触ってください」「楽器は生き物だから、５分でも 10 分でも関わっていると関係性が深くなり、馴染んでいく」と。それを素直に何とか頑張っていたら、なんとなく手の運びが整ってきた。

映画の冒頭でオーケストラの一員として弾くシーンは、左手の動きだけだがその場で覚えなければならなくて、使われたカットはほんの数秒だったが、カメラの脇に先生にいてもらい、上げ下げする手の動きを横目で見ながら演じていた。

♪（当時のことを思い出してもらうため、 中木健二・音楽監督が生演奏）聞いてみてどうだったか

久しぶりに聞いた、本当に素敵な音色。今の一瞬だけでも心に触れるものがあった。

上山音楽祭はその土地にチェロの音色が響く、上山の自然もきっと心待ちにしていたというか、美しい風景の中に良い音色が響くのは、それだけでとっても満たされる気持ちになると思う。

♪最後にラストコンサートを聞きに来てくれた方、 受講生、 関わっている多くの方々にメッセージを。

健康、観光、環境をキーワードに、“心と体をうるおすまち” というクアオルトの考え方に、この上山音楽祭という文化が加わって、最高の、最強の音楽祭になっているし、これからも成長していくと思う。10 日間という短い期間だが、きっと皆さんのこれからの人生に大きく影響を及ぼしてくれる、素敵な時間になると思うので、存分に楽しんで欲しい。私もまた、いつか何らかの形で参加できる日を心待ちにしている。